慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	完了形の文法化再考 : 文体の視点から
Sub Title	Grammatikalisierung des Perfekts neu bedacht : Aus stilistischer Perspektive
Author	黒田, 享(Kuroda, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.49 (2012.) ,p.137- 154
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大谷弘道教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kodo OTANI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20120330-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

完了形の文法化再考[1)]

――文体の視点から――

黒　田　　享

1.「過去表現」としての現在完了形

ドイツ語文法において一般に現在完了形と呼ばれるのは，次のような動詞 haben または sein の現在形と動詞の過去分詞形が結びついた形式である。

（1）　Ich habe in Tokyo gewohnt.
（2）　Ich bin aus Tokyo gekommen.

この両者は日常的なドイツ語において頻繁に用いられる形式である上，ドイツ語教育においてもかなり早い段階で導入される形式であるので，ドイツ語を学習したことがある者にとってはなじみ深い動詞形式であると言

1）本稿は基本的に 2010 年 5 月 29 日に日本独文学会春季研究発表会で公表した同標題による口頭発表に基づいているが，同年 10 月 6 日に Janusz Taborek 博士の招きにより Poznań 大学現代語現代文学部において行った講演の内容も一部含まれる。本稿の本紀要での発表をお勧めくださった大谷弘道教授，そして学外からの投稿をご了承くださった本紀要関係各位に深く感謝したい。本稿の内容には日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号 21520426，平成 21–24 年度基盤研究（C）「テキスト言語学的視点からのドイツ語助動詞文法化の多角的研究」（研究代表者：黒田　享））の交付を受けて実施した研究の成果の一部が含まれている。

えるだろう。

英語にも並行した形式を持つ，やはり現在完了形と呼ばれる動詞形式があるが，（動詞の不定形式が文末に置かれるという英語とドイツ語の配語法上の原則に基づく違いは別にしても）助動詞として動詞 have のみを許すという点でドイツ語の現在完了形とは異なる。

ドイツ語と英語の現在完了形の違いは助動詞として許容される動詞の種類だけに限られない。英語の現在完了形は，過去に起こったことがらと関連しつつも，過去のできごとの表現形式としてより一般的に用いられる過去形との置き換えが原則的にできないが，ドイツ語においては現在完了形が口語における基本的な過去表現の形式であるとまで言われることがあり[2)]，ドイツ語と英語の現在完了形の機能上の違いは口語において特に顕著であると言える。

現在完了形に相当する動詞形式は英語とドイツ語だけにあるわけではなく，スウェーデン語やノルウェー語といった北ゲルマン語にも見られるが，英語と同様，現在完了形は過去形と広く置き換えが可能なわけではない。その意味で，現在完了形が過去形の守備範囲を浸食しているとも言えるドイツ語の状況はゲルマン語の中でも特異なものであると言えるのではないか。このことは，ゲルマン語の完了形がどれも haben（あるいは sein）の語彙的意味が保たれた表現から文法化[3)] を経て成立したと考えられてい

2）例えば Dudenredaktion（2009: 514）など。

3）近年，認知言語学あるいは言語類型論と結びつける形で「文法化」現象に着目する議論が頻繁に見られるようになっている。ある言語表現が本来の語彙的意味から離れた極めて抽象的な（ある意味で「文法的」な）機能を果たすようになることは言語史上，多くの言語でしばしば見られることである。しかし，個々の言語表現，あるいは個別言語を超えて「文法化」の度合いを判定する方法が確立していない現状では，同系統の言語における特定の言語表現を離れる形で「文法化」現象を論じることには大きな問題があるだろう。

る[4] ことを考慮すると興味深い問題である[5]。

現状では，ゲルマン語全体の中でドイツ語において現在完了形の本来の意味の希薄化が特に進んだ背景はさほど明らかではない。この問題の解明にはドイツ語のみならずゲルマン語全体の歴史的変化に目を配った大規模研究が必要になることだろう。本稿では，そうした研究に寄与することをねらい，ドイツ語史研究において一つの重要なトピックである現在完了形が過去形に並ぶ過去の形式として定着した時期について考察することにしたい。

2.「過去形消失」の研究状況

ドイツ語の現在完了形が過去のできごとの表現形式として定着しているとすれば，過去形との機能上の棲み分けについての疑問が浮かぶのは自然

4）ゲルマン語の「完了形」（現在完了形は助動詞が「現在形」になった「完了形」として捉えたい）が haben や sein の語彙的意味が強く残った構文から（こうした用法はゴート語において例が見られる），その本来の意味が希薄化することによって成立したという考え方は Paul（1920: 136–137），Behaghel（1923: 271–272），Dal（1966: 121–122），Wessén（1965: 128–132）にも受け継がれており，相当の長期間に渡って定説として定着していると考えられる。

5）フランス語においても avoir あるいは être を助動詞とする過去のことがらの表現が広く用いられており，ドイツ語との連動関係があるかも知れない（Dal（1962: 122）を参照）。ただし，ドイツ語での完了形の成立をフランス語の影響に帰することは難しいだろう。ある言語が異なる言語に影響することは優勢な言語から劣勢な言語への影響という形で見られるのが普通である。ドイツ語圏全体としては幅広い社会層においてフランス語がドイツ語に対して優勢だったことは見られなかったし，haben や sein を助動詞とする完了形はドイツ語や英語だけではなく，フランス語からの影響がより希薄であったと言える北ゲルマン語においても広く用いられる形式でもある。また，複合的な過去表現は Ternes（1988）が示すように中部ヨーロッパにおいて言語系統とは必ずしも一致しない形で広まっている。ドイツ語における過去表現としての現在完了形の発達はむしろこうした地域的要因との関連で捉えなおすことが必要かも知れない。

なことである。実際にこれは，構造主義言語学の手法によるドイツ語研究が始まって以来，繰り返し取り上げられて来た問題である。純粋な文法研究の枠組みとは違ったアプローチだが，広く関心を集め，最終的に 6 版まで版を重ねた Harald Weinrich の時制論（Weinrich（2001）など）も現在完了形と過去形の違いが考察の中心になっている。しかしこうした議論はあくまで現代ドイツ語を対象として，ドイツ語の歴史的変遷とは切り離された形で行われてきたものである。

完了形も含め，ドイツ語の様々な動詞形式が歴史的にどのような変遷を経てきたかについては Oubouzar（1974）によって記述されている。また，「完了形」の歴史的変遷を特に詳しく調査した研究としては Dentler（1994, 1997）がある。しかし，現在完了形が過去表現として用いられるようになった過程についての先行研究としては特に Lindgren（1957）を挙げなくてはならないだろう。Lindgren（1957）は現在完了形の歴史的変遷自体についてはあまり詳細に論じていないが，現在完了形が過去表現として定着するに至った背景を「過去形消失（Präteritumschwund）」として中心的に取り上げた上，Duden 文法でも参照されており[6]，後世に及ぼした影響が大きい研究であると言える。また，Oubouzar（1974）と Dentler（1994, 1997）は現在完了形の機能変化については Lindgren よりも詳しく論じているが，過去形についてはあまり詳しく調査を行っていない。

Lindgren（1957）は，73 点のテキストから巨大なコーパスを構築し，そこから採集した 15 万件に及ぼうとする用例に基づいて過去形と現在完了形の関係を論じている。Lindgren（1957）が展開する主張は，まず上部ドイツ語（Oberdeutsch）における語尾音消失（Apokope）の結果として過去形がまず 1500 年前後に失われることで現在完了形が過去のことがらを表す形式として定着し，これが 1530 年前後に文語へも波及したということだ。つまり，一般的なドイツ語の歴史区分の上では初期新高ドイツ

6）Dudenredaktion（2009: 514）を参照。Oubouzar（1973），Dentler（1994, 1997）でもこの考え方が採られている。

語期に過去表現としての現在完了形が広く用いられるようになったことになる[7)]。

しかし，Lindgren（1957）の行っている議論には問題がないわけではない。まず挙げられるのは，Lindgren（1957）の研究が文字化されたテキストから構築されたコーパスに依っていることである。言語使用の実態を音声の形で記録する技術が確立したのがごく最近である以上，言語史研究の一次資料が文字化されたテキストになることは避けられない。しかし，ドイツ語において現在完了形が一般的な過去の表現として働くことは，特に口語において顕著に見られる現象である。Lindgren（1957: 116）自身も現在完了形による過去形の機能領域の浸食は口語から始まったと想定しており，また，口語に近い性格を持つテキストほどこの変化が明らかであるとも指摘している。現代ドイツ語との連続性という点からは過去のことがらの表現形式としての現在完了形は特に口語で発達したものであると想定するのが自然であり，文字化されたテキストのみを資料とする以上，考察にはかなりの慎重さが求められるだろう。

また Lindgren（1957）は，どの程度変化が進めば「過去形消失」が起こったと見なせるのか明確にしていない。Lindgren（1957）では過去のことがらの表現の 6 割から 7 割において現在完了形が選ばれていると現在完了形が過去形の代替形式として機能していると見なされるようだが，果たしてこの比率が「過去形消失」の判定基準として適切であるかについてもまだ検討の余地がある。

しかし最も大きな問題として挙げられるのは，Lindgren（1957）の現

7）この議論はすでに挙げた Duden 文法における該当箇所（Dudenredaktion（2009: 514））でも紹介されている。ただし Lindgren（1957）自身は，現在完了形が過去表現として一度定着はしたものの，その後再びこの現在完了形の用法が廃れ，現代ドイツ語においては現在完了形と過去形が過去表現として併存しているという考え方を採っているようである。このことは Lindgren（1957）に言及する研究においてしばしば見落とされていることなので注意が必要である。

在完了形と過去形の比較が単純な出現数の対比に終わってしまっていることだろう。現在完了形と過去形の間には，後述するような使用環境による分布の違いがあることが知られており，コーパス全体における出現頻度の単純な比較だけでは両者の関係を適切に捉えることは難しいだろう。「過去形消失」が特定の使用環境で特に進んでいるのであれば，全体的にはそれほど目立たなくとも，変化の進行度が高いと考えられるからである。

3. 中高ドイツ語騎士文芸における現在完了形と過去形

以上のような Lindgren（1957）の問題点を踏まえつつ，「過去形消失」の起こった時期について考察してみたい。Lindgren（1957）では具体的な用例があまり提示されていないため，規模としてははるかに小さくなるが改めてコーパスを構築し，そこから採集したデータを基に議論を進める。

Lindgren（1957）において主張されているように，「過去形消失」が16 世紀に起こったとすれば，それ以前のドイツ語では過去のことがらは基本的に過去形によって表されていたはずである。そこで，中高ドイツ語の騎士文芸における現在完了形と過去形の関係を探ってみることにしよう。調査対象とするのは 1190 年代に成立したと広く考えられている Hartmann von Aue による「哀れなハインリヒ（Der arme Heinrich）」である[8)]。

8）底本の書誌情報は稿末を参照されたい。今回底本として用いたのは 14 世紀前半の写本に基づく校訂版である。このような校訂版は本来の原典の言語的性格をどの程度忠実に再現しているか明確でないため，言語史研究の一次資料として用いることは本来適切ではない（Paul（2007: 26））。この問題は，「哀れなハインリヒ」については最も重要な写本が焼失してしまっているため，特に大きい。統語論においては書記論や形態論の場合ほど重大ではないにせよ，この問題は看過できないものであるので，ここで紹介する調査結果はあくまで当面の出発点としての性格のものであり，いずれより信頼性の高い資料による検証を待つものであることを強調しておきたい。

表 1 「哀れなハインリヒ」における過去形・現在完了形の分布

過去形			現在完了形	
能動態（非助動詞）	助動詞	受動態	能動態	助動詞
394 例	66 例	21 例	53 例	1 例

さて，「哀れなハインリヒ」全体では 1673 件の動詞形式を採集することができた。このうち，過去形は 481 件，現在完了形は 54 件である。過去形の出現頻度は現在完了形のほぼ 9 倍であり，過去のことがらの表現としての比率は過去形が圧倒的に高い[9)]。

しかし，過去形と現在完了形の間には出現環境にも違いがある。Hoppe-Beugel/Hauser-Suida（1972: 128–150）や Latzel（1977: 82–89, 2004: 83）などの現代ドイツ語における過去形と現在完了形の機能の違いを計量的に調査した研究によると，結びつきやすい動詞の性質の点で両者の間には大きな違いがある。具体的には，haben や sein といった動詞，あるいは話法の助動詞のような状態を表す表現は現在完了形よりも過去形で用いられることがはるかに多いようなのだ。

そこでまず，具体的に「哀れなハインリヒ」において過去形と現在完了形がどのような動詞形式と親近性があるかを観察してみることにしたい。表 1 に示すとおり，過去形は能動態の動詞（助動詞を含む場合は除く），助動詞，受動態に用いられることが観察できる。他方，現在完了形は能動態の動詞（助動詞を含む場合は除く）と助動詞に用いられることが見られる。ただし，助動詞が現在完了形になることは一例のみにしか見られない。

個々の用例からも，状態表現に現在完了形より過去形で表される傾向があることが見てとれる。例文（3）のように，kunnen（～できる）のよう

9）現在完了形は未来時において完了することがらを表すことも可能である（Paul（2007: 292））が，「哀れなハインリヒ」においてはこの用法は確認することができなかった。すなわち，現在完了形はすべて過去のことがらの表現に用いられている。

な話法の助動詞は現在完了形になることがない。また，話法の助動詞ではなくても，例文（4）の gebresten（欠けている）のように状態を表す動詞は現在完了形にはならない。

（3） ich enkunde zuo Salerne / deheinen meister vinden / der sich mîn underwinden / getörste ode wolde.（436 詩行）「私はサレルノで私のことを引き受けようという医者を見つけられなかった」

（4） swaz dô scheltens ergienc, / der arme Heinrich ez emphienc / tugentlîchen unde wol, / als ein vrumer ritter sol / dem schoener zühte niht gebrast.（1341 詩行）「どんなにひどく罵られようと，哀れなハインリヒは，作法を知った優れた騎士に相応しく礼をもって立派に受け入れた」

現在完了形が用いられるのは基本的に，例文（5）の verjehen（言う）のように時間的な幅を持たない動作を表す動詞の場合だ。ただし，そうした動詞は過去形になることも頻繁に見られ，決して現在完了形ばかりが用いられるわけではない。例文（6）として binden（～を結ぶ）が過去形になった例を挙げた。

（5）du enmaht es niht bringen, / als dû uns hie hâst verjehen.（577 詩行）「お前はいま言ったようなことはやりとげられない」

（6）dar ûf er si vil vaste bant / und begunde nemen in die hant / ein scharphez mezzer daz dâ lac,（1207 詩行）「彼は彼女をその上に固く縛りつけ，そばにある鋭い刃物を手に取った」

表 2 には，表 1 に記載されたグループごとに状態表現がどの程度の頻度で現れるかを示した[10]。これを見ると，現在完了形の状態表現が全く

10）能動態で過去形になることが見られる状態を表す動詞（助動詞を除く）

表２　過去形・現在完了形と結びつく状態表現の分布

過去形			現在完了形	
能動態（非助動詞）	助動詞	受動態	能動態	助動詞
114 例	33 例	14 例	0 例	0 例

見られないのに対し，過去形は状態表現の占める比率がかなり高いことがわかる。これは非常に大きな違いであり，過去形と現在完了形が過去のことがらの二つの表現形式として単純に並べて論じることができないことを示している。

「完了形」は古高ドイツ語期のテキストにおいてすでに現れているが，その段階でも状態表現と共に用いられることはなかったようである[11)]。「哀れなハインリヒ」で現在完了形と状態表現の親和性が低いのは，こうした現在完了形の本来の性質が残っていることに原因があるのかも知れない。いずれにせよ，現在完了形が用いられる範囲はもともと過去形のそれよりも狭い。ただし，「哀れなハインリヒ」全体としては，過去のことがらの表現としては過去形が圧倒的に優勢なので，中高ドイツ語においては「過去形消失」はまだまだ起こっていなかったとする考えが成立する。

は gebresten（欠けている），haben（～を持っている），sitzen（座っている），slâfen（寝ている），stân（立っている），vürhten（怖れる），wesen（～である），wizzen（～を知っている）など 39 種である。また，過去形と結びつく助動詞のうち状態表現と見なせるのは kunnen（～できる），müezen（～しなければならない），mügen（～できる），soln（～しなければならない），wænen（～と思う）など 7 種である。受動態においては状態受動構文を状態表現と見なした。なお，全体では能動態で過去形になる動詞としては 160 種（助動詞を除く），過去形になる助動詞としては 15 種，現在完了形と能動態で結びつく動詞 36 種（助動詞を除く），現在完了形になる助動詞としては 1 種が確認できた。

11）古高ドイツ語における「完了形」と状態表現の関係については拙著 Kuroda（1999）を参照されたい。

4. 直接引用の問題

「哀れなハインリヒ」は中高ドイツ語の口語の資料ではない。受容は基本的に朗唱という文字によらない形でされたとは思われるが，入念に推敲を重ねられたテキストであり，口語を直接反映するようなものではないだろう。その意味で，「哀れなハインリヒ」に基づいた現在完了形と過去形の考察は Lindgren（1957）において見られた問題を解決するものとは言えない。

しかし，「哀れなハインリヒ」は中高ドイツ語騎士文芸の中でも登場人物の発話の直接引用がとりわけ多く見られるという特徴を持っている。直接引用は口語を再現する形式であるので，文芸作品であっても直接引用部分には口語的な性格を持った言語表現が用いられる可能性が高い。その点で「哀れなハインリヒ」はドイツ語史における現在完了形の機能の変化について考察するための資料として貴重であると言え，それが本稿でこのテキストを検討の対象とした理由である。

もちろん文芸作品はあくまで創作されたテキストであり，形の上で直接引用の箇所があったとしても，それは現実になされた発話の忠実な再現であるとは限らない。実際にテキストによっては直接引用の部分で，自然な発話では用いられたとは想像しがたいような複雑な表現が用いられることも見られる[12)]。「哀れなハインリヒ」の直接引用部がどの程度中高ドイツ語の口語を反映しているかは未知数だ。それでも，直接引用部が現実の口語を想起させるような性格をある程度持っていたと考えることは不可能ではないだろう。そうでなければ直接引用という文体の効果が全く得られなくなり，この文体のそもそもの存在意義が失われることになるからだ。

ここで改めて，直接引用の部分[13)] に限って過去形と現在完了形の分布

12）具体例については Betten（1990, 1991）を参照されたい。

13）叙事詩の特徴として，「哀れなハインリヒ」には語り手が前面に現れる箇所がある。こうした箇所は朗唱の場における作者自身の発話として捉える

表3　「哀れなハインリヒ」における過去形・現在完了形の分布（直接引用部）

過去形			現在完了形
能動態（非助動詞）	助動詞	受動態	能動態
29 例	8 例	4 例	48 例

を比較してみることにしよう。「哀れなハインリヒ」全体では，直接引用部分から 846 件の動詞の用例を採集することができた。このうち過去形は 41 件，現在完了形は 48 件である。

前節で示したように「哀れなハインリヒ」全体では過去形の用例数は現在完了形のほぼ 9 倍に達している。それを考えると直接引用部分では過去形と現在完了形が頻度の上でほぼ拮抗していると言え，「哀れなハインリヒ」全体とは大きく異なった様相を呈している。直接引用部分に限って言えば，現在完了形が過去の表現としてかなり重要になっていると考えられるだろう。数値だけを見ると現在完了形の方が過去形よりも多く見られるが，両者の差はまだ小さいので，現在完了形が過去のことがらの表現として優勢であるとまでは言えない。

そこで次に，過去形と現在完了形がそれぞれどのような動詞形式と結びついているかを前節の表 1・表 2 にならって観察してみたい。

表 3 を見ると，直接引用部でも「哀れなハインリヒ」全体の場合と同様に，過去形が様々な動詞形式に用いられることがわかる。しかしここで特に着目したいのは，助動詞や受動態が過去形になる用例の比率が「哀れなハインリヒ」全体の場合に比較して高くなっていることだ。

同じことは過去形になる状態表現の比率についても言える。表 4 は上の表 2 にならって過去形と現在完了形が状態表現に用いられる用例の分布を示したものだが，「哀れなハインリヒ」全体の場合に比べると状態表

ことも可能なので，直接引用の一種として捉えることもできるだろう。しかし本稿ではあくまで登場人物の発話の再現部のみを直接引用として扱うことにする。

表 4　過去形・現在完了形の状態表現の分布（直接引用部）

過去形			現在完了形	
能動態（非助動詞）	助動詞	受動態	能動態	助動詞
11 例	5 例	3 例	0 例	0 例

表 5　過去形・現在完了形の非状態表現の分布（直接引用部）

	過去形	現在完了形
動詞数	19 例	35 例
用例頻度	22 例	48 例

現が過去形になる用例の比率が増加していることがわかる[14)]。「哀れなハインリヒ」全体でも状態表現が過去形になる傾向がもともとあったが，直接引用部ではこれがさらにはっきりしてきているわけだ。

となると，現在完了形は単に頻度から考えられる度合い以上に過去の表現形式として重要である可能性がある。現在完了形の状態表現の頻度が低く，使用環境の点で過去形よりもずっと制限されているからだ。そこで視点を逆にし，状態を表さない表現との関連から過去形と現在完了形を比較してみたい。

表 5 は，動詞の種類の点でも，用例頻度の点でも，非状態表現については過去のことがらの表現形式として現在完了形が過去形よりも優勢であることを示している。口語では，中高ドイツ語の段階で現在完了形が過去

14）直接引用部において，能動態で過去形になる状態動詞（助動詞を除く）は haben（～を持っている），slâfen（寝ている），stân（立っている），wesen（～である），verdriezen（退屈に思わせる），wizzen（～を知っている）の 6 種である。また，過去形になる助動詞のうち状態表現と見なせるのは kunnen（～できる），mügen（～できる），soln（～しなければならない）の 3 種である。状態受動構文が過去形になった例も見られた。直接引用部全体で過去形になる能動態（助動詞を除く）の動詞は 22 種，助動詞は 4 種，現在完了形になる能動態（助動詞を除く）の動詞は 35 種である。

の表現形式としてすでに定着していたと考えられるだろう。Lindgren（1957）は現在完了形が過去の表現形式として定着した時期を 1500 年前後としたが，この時期はもっと前に想定できるかもしれない。状態表現は，歴史的経緯から現在完了形との親和性が特に弱いと言え，特殊なケースとして扱うべきだと考えられるからだ[15]。また，この考え方に立てば現代ドイツ語との連続性も捉えることができる。「過去形消失」は中高ドイツ語ですでに起こっていた事象であると言えるだろう。

5. 中高ドイツ語散文における過去形と現在完了形

前節で述べたような仮説はあくまで叙事詩という文芸作品から採られたデータに基づくものであるので，異なったタイプのテキストからのデータに基づいて検証することが望まれる。そこで最後に，中高ドイツ語の散文テキストにおける過去形と現在完了形の分布の違いを取り上げてみたい。調査対象としたのはトマス・アクィナス「神学大全」の中高ドイツ語訳である（14 世紀に書かれた写本に基づく）。これは「哀れなハインリヒ」の場合とは違い，思弁的内容がモノトーンに論述されるスタイルを持つテキストである。なお，全体はかなりの量になるので，調査はテキスト冒頭から「哀れなハインリヒ」とほぼ同量のデータが得られる部分のみに限った。

今回「神学大全」から採集できた動詞用法データは全体で 1812 件である。そのうち過去形は 147 件，現在完了形は 29 件が確認できた。つまり過去のことがらの表現形式としては過去形がはるかに優勢である[16]。もっとも，「哀れなハインリヒ」全体の場合に比べると現在完了形の比率が

15）この問題点は Weinrich の時制論（Weinrich（2001））に見られるような，基本的に過去形と現在完了形が選択可能なケースを中心に両者の差異を論じる研究でも考慮されることがない。

16）「哀れなハインリヒ」の場合と同様，「神学大全」においても未来において完了することがらを表す現在完了形の用例を見つけることはできなかった。

表６ 「神学大全」での過去形・現在完了形の分布

過去形			現在完了形	
能動態（非助動詞）	助動詞	受動態	能動態	助動詞
98 例	18 例	31 例	28 例	1 例

表７ 過去形・現在完了形と結びつく状態表現の分布[18)]

過去形			現在完了形	
能動態（非助動詞）	助動詞	受動態	能動態	助動詞
53 例	18 例	7 例	0 例	1 例

若干高くはなっている[17)]。

さて，表６は過去形と現在完了形がどのような動詞形式に用いられるかを示しているが，「哀れなハインリヒ」の場合と同様，助動詞や受動態に用いられる形式は基本的に過去形であることがわかる。また，表７に示すように，現在完了形はやはり基本的に状態表現に用いられることがないようだ。

具体例を見てみよう。例文（7）は話法の助動詞である mügen（～できる）が過去形になった例，例文（8）は状態動詞である wesen（～である）が過去形になった例である。現在完了形が見られるのは例文（9）のよう

17）有意水準 α=0.05 による検定では有意な比率の差がある。

18）能動態で過去形になる状態動詞（助動詞を除く）は bedurfen（～が必要である），gebresten（欠けている），haben（～を持っている），heizen（～という名である／～と呼ぶ），soln（しなければならない），vürhten（怖れる），wesen（～である），wizzen（～を知っている）の 8 種である（全体では 32 種の動詞が過去形と，18 種の動詞が現在完了形と結びつく）。また，過去形になる助動詞はすべて状態表現と見なせる müezen（～しなければならない），mügen（～できる），soln（～しなければならない），wellen（～することを望む），wesen（～である）の 5 種である（mügen（～できる）は 1 例だけ現在完了形になった例が確認できる）。

に時間的な幅を持たない動作を表す動詞（ここでは nemen（～を取る））の場合ばかりである。唯一，例文（10）にあっては話法の助動詞である mügen（～できる）が現在完了形になっている[19]。

（7）Wan got, der moht übermitz sin algeweltig craft die menschlichen naturen in einer andern wis wol widergebraht han. (3q1a02) [Deus enim per suam omnipotentem virtutem poterat humanam naturam multis aliis modis reparare.]「なぜなら神は，その全能の力により，別の方法で人間の本性を回復することもできただろうから」

（8）Under dar umbe so ist ez offenbar, daz got behörlich was, daz er ingefleischet wurde. (3q1a01) [Unde manifestum est quod conveniens fuit Deum incarnari.]「なので，神が受肉するのは適当であったということが明らかだ」

（9）also hat er an sich genomen lip unde sele durch die ordenunge, die er hat zuo der menschlicher naturen. (3q6a05) [ita assumpsit corpus et animam propter ordinem quem habent ad humanam naturam.]「……同様に肉体と魂とを，彼が人間本性に対して持っている秩序のゆえに受容した」

（10）so muoz man daz sagen, daz die götliche persone ane die menschlich nature, die si an sich genomen, hat mügen ein ander nature an sich nemen nach der zale. (3q3a07) [oportet dicere quod persona divina, praeter naturam humanam quam assumpsit possit aliam numero naturam humanam assumere.]「それゆえ神のペルソナが，それが受容した人間本性以外に，数に従って他の本性を受容することができたと言わなけれ

19）ラテン語原典のここに挙げた例に対応する箇所では例外なく完了形が用いられている。「神学大全」の原典では過去のことがらの表現としては基本的に完了形が使われており，過去形と現在完了形の使い分けは原典における動詞形式と連動しているものではないと言える。

ばならない」

「論述」テキストでは口語や文語とは違ったスタイルが確立していた可能性も排除できないが，「神学大全」における過去形と現在完了形の使い分けは，全体として「哀れなハインリヒ」の場合とそう違うものではないようである。

6. 結語

過去形と現在完了形の関係を捉えるために Lindgren（1957）が基礎資料としたテキストはどれも，過去のことがらを時系列に沿って語るスタイルのものばかりである。こうしたタイプのテキストでは現代ドイツ語でも過去形が過去のことがらの表現形式として優勢だ[20)]。Lindgren（1957）の考察も，こうした基礎資料となるテキストの性格の影響を受けたところがあるのかも知れない。

現在のドイツ語史研究では，従来は研究対象にされなかったようなテキストも資料として用いる傾向が認められる。これは単に未開拓の領域であるからというだけでなく，ドイツ語の歴史を実態に近い形で捉えるために避けられない展開であると言え，今後重要度が増してくることだろう。

参考文献

Behaghel, Otto (1923): *Deutsche Syntax*: *Eine geschichtliche Darstellung.* Band II. Heidelberg: Winter.

Betten, Anne (1990): „Zur Problematik der Abgrenzung von Mündlichkeit und Schriftlichkeit bei mittelalterlichen Texten". Betten, Anne (Hg) *Neuere Forschungen zur historischen Syntax des Deutschen: Referate der internationalen Fachkonferenz Eichstätt 1989*. Tübingen: Niemeyer. S. 324–335.

Betten, Anne (1991): „Direkte Rede und epischer Bericht in der deutschen Romanprosa". *Sprache und Literatur: In Wissenschaft und Unterricht* 16, S. 25–41.

20）Dudenredaktion（2009: 513）。

Dal, Ingerid (1966): *Kurze deutsche Syntax: Auf historischer Grundlage*. 3., verbesserte Aufl. Tübingen: Niemeyer.

Dentler, Sigrid (1994): „Über die Erweiterung des zeitreferentiellen Funktionsbereichs des Perfekts im Mittelhochdeutschen“. John Ole Askedal/Harald Bjorvand/Kurt Erich Schöndorf (Hg.): *Sprachgermanistik in Skandinavien II: Akten des III. Nordischen Germanistiktreffens Mastermyr bei Olso, 2.–5.6. 1993*. Olso: Universität Oslo. S. 52–65.

Dentler, Sigrid (1997): *Zur Perfekterneuerung im Mittelhochdeutschen: Die Erweiterung des zeitreferentiellen Funktionsbereichs von Perfektfügungen*. Göteborg: Acta universitatis gothoburgensis.

Dudenredaktion (Hg.) (2009): *Duden: Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*. 8., überarbeitete Auflage. Mannheim/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Hauser-Suida, Ulrike/Hoppe-Beugel, Gabriele (1972): *Die Vergangenheitstempora in der deutschen geschriebenen Sprache der Gegenwart*. München/Düsseldorf: Hueber.

Kuroda, Susumu (1999): *Die historische Entwicklung der Perfektkonstruktionen im Deutschen*. Hamburg: Buske.

Latzel, Sigbert (1977): *Die deutschen Tempora Perfekt und Präteritum*. München: Hueber.

Latzel, Sigbert (2004): *Der Tempusgebrauch in deutschen Dramen und Hörspielen*. München: iudicium.

Lindgren, Kaj B. (1957): *Über den oberdeutschen Präteritumschwund*. Helsinki/Wiesbaden: Akateeminen kirjakauppa/Harrassowitz.

Oubouzar, E. (1974): „Über die Ausbildung der zusammengesetzten Verbformen im deutschen Verbalsystem”. *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* (Halle) 95, 5–96.

Paul, Hermann (1920): *Deutsche Grammatik*. Band IV. Teil IV: Syntax (zweite Hälfte). Halle: Niemeyer.

Paul, Hermann (2007): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 25. Aufl. Tübingen: Niemeyer.

Ternes, Elmar (1988): „Zur Typologie der Vergangenheitstempora in den Sprachen Europas (Synthetische vs. analytische Bildungsweise)“. *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik* 44, 332–341.

Weinrich, Harald (2001): *Tempus: Besprochene und erzählte Welt*. 6., neubearb. Aufl. München: Beck.

Wessén, Elias (1965): *Svensk språkhistoria III: Grundlinjer till en historisk syntax*. Andra upplagan. Stockholm/Göteborg/Uppsala: Almqvist & Wiksell.

テキスト底本

Hatmann von Aue: *Der arme Heinrich*. Hg. von Hermann Paul, neu bearbeitet von Kurt Gärtner. 17., durchgesehene Auflage. Altdeutsche Textbibliothek 3. Tübingen: Niemeyer. (2001)

Middle High German Translation of the *Summa Theologica* by Thomas Aquinas. Edited with a Latin-German and a German-Latin Glossary by Bayard Quincy Morgan & Friedrich Wilhelm Strothmann. Stanford University Publications, University Series, Language and Literature Vol.VIII, No.1. New York: AMS Press. (1967)